

野の花館だより

2006/秋号 / No.41

高校野球の爽やかな熱戦が終われば・・・もう涼風が立ち夏は終わり・・・子供達は宿題に追われていることでしょう。今夏の甲子園は本当に面白かったですね。久しぶりに高校野球の面白さを満喫できました。

梅雨が長引き、「花いちもんめ」の公演準備は本当に大変でした。この日はオースターは延長になり、フェニックスジャズインが中止になったりと散々でしたが野の花館では開演とともに雨は上がりました。この日のために神戸から駆けつけた釜淵ファミリー（90年代中期南九大卒）は家族が5人になっていて私達を驚かせました。野の花館もだいふ歳をとったなあと思うことしきりでした。

8月中旬、バングラデシュから帰られた川原さんが、お仲間とご一緒に松尾の資料を調べに見えました。

土呂久松尾告発35周年の準備が着々と進んでいるなあと感じました。野の花館では秋の企画がこの松尾土呂久35周年と関連した行事になります。まず、9月にこの館と深いかかわりのある川原一之氏のお話を聞きます。

高鍋国際交流協会・宮崎自然と未来を守る会との共催です。この機会にぜひ川原さんのお話を聞いてください。



釜淵ファミリー - と (二人の会)

土呂久からバングラデシュへ～アジアに共に歩む人がいる

川原一之報告会

1970年代はじめ、宮崎県高千穂町土呂久の慢性ヒ素中毒事件の責任追及と患者支援のために新聞記者をやめた川原一之氏はヒ素汚染に苦しむアジア各地からの要請に応じて海を渡る。3000万人がヒ素汚染水を飲んでいるバングラデシュでのNGO活動は現地の人々と手を携え、研究者、技術者をまきこみ、安全な水探しや貧困問題にぶつかっていく・・・

とき 2006年9月16日(土) 20:00～

ところ 高鍋町・野の花館

野の花館子どもの夕べ 2006

2006年11月3日(祝)

スケジュール 14:00 受付

14:20 いろいろびらき・火を使っておやつづくり

15:00 紙芝居

16:00 映画上映「咽び唄の里・土呂久」

18:30 交流会

日本には、環境省が認めた公害病が4つあります。鉱山が排出したカドミウムによるイタイイタイ病、工場の廃液に含まれていた有機水銀による水俣病、大気汚染による呼吸器の四日市喘息、第4が土呂久の慢性ヒ素中毒症です。1971年11月13日に岩戸小の先生が、発表したことで世に知られることとなりました。今年はそれから丁度35年目になります。

「花いちもんめ」第6回公演

7月22日(土): 7時開場: 7時半開演

戦争の悲惨さ切々と

濱崎さん(宮崎)芝居で訴え

高鍋で平和を
考える集い

高鍋町南高鍋の特定非
営利活動法人(NPO法
人)「野の花館」は二十
二日、平和を考える集い
二〇〇六を開催。演劇企



一人芝居で戦争の悲惨さを演じた濱崎けい子さん

二人の会の濱崎けい子さん(宮崎)が一人芝居「花いちもんめ」を上演した。

濱崎さんは、第二次世界大戦時に旧満州に送られた開拓団員の二児の母の役を熱演。敗戦後、ソ連軍からの逃避行の末に息子を病気で亡くし、娘を中国人に売らなければならなかった母親の後悔と懺悔(さんげ)の念を迫真の演技で伝えた。

娘を手放したことを悔やみむせび泣くシーンや残留孤児として帰国した娘を迎えに行けない母親の複雑な心境を訴える場面では、目頭を押さえる観客の姿が多く見られた。親子で訪れた木城町出店の会社員日下部志保さん(三三)は「母親の立場で観劇し、とても切ない気持ちになった。どんな理由があっても戦争はいけませんね」と話していた。濱崎さんは「戦争の記憶が薄れゆく今、中学生など若い人たちに公演を通して戦争の悲惨さを語り継いでいきたい」と今後の活動に意欲を見せた。

「花いちもんめ」をみて・・・

* 子を売った母の鬼気せまるようななげきや苦痛の叫びが切々と胸を打ち、感動しました。
(谷山温子 17才)

* あいにくの悪天候で、本当に公演は行われるのか?とも思ったのだが、それまでの準備を思い、おもいきって出かけてきた。一つ瀬川をすぎた頃から雨足も落ち着き、なんと公演がスタートする時にはやんでしまうという怪異。この作品を観るには絶妙なロケーションであった。

今回の舞台も、今までとは雰囲気違って、外の景色がとても生かされていたと思う。何度観ても子を手放す所は身が震える思いがした。思わず抱いていた子どもをギュッとつかんでしまった位に。

小学生の子も一緒につれていったのだが、何かを思っていた様だった。始まる前はケンカをしてしまい、ふててソッポをむいていたのだが、話しが進むにつれ引きこまれていたらしい。帰りは無言だった。戦争がどういったものであったのか、親である私は上手く説明できない。ただ、このような作品に触れる時、傍で共に考え、感じられる自分でいたいものだと思う。
(金丸智子)

* ふる里求めて花いちもんめ 濱崎さんのお芝居を野の花館で何回目だろうか。

お芝居が始まると正座をして身動きもしないでいる事が不思議でならない。毎回違った想いでみている自分を発見する。

1943年8月10日私は誕生し父の仕事の関係で満州・ハルピン・奉天で生活していた。終戦後4才で日本に帰って来る時の旅は、楽しかったのだろうか？ 父が焼酎が入るといつもはじまる。引揚船での親睦会でのど自慢大会があり歌の好きな父から賞をとった事を何度も何度もきかされた。4才で帰ってきてのふる里は近所のおねえちゃん、従姉妹達と一日中一生懸命遊んでいた事を覚えている。そんな時私のことばや表現が田舎の子供達にはめずらしくおもしろかったようだ。たとえばおもちゃはないがそこあたりの石を拾い数え唄や手をつないで遊ぶ時に満語でイ・アール・サン・スー・ウー・リュウ・チイ・パー・チュー・シィと1~100まで私にいわせてみんな楽しかったという。でもその内自分からしゃべらなくなったのかわすれたのかわからないが学校で社会科の時間戦争のことを少し学習したことや、世間では戦争についていろんな意見がとぎざたされる中であー私は戦争の背景の一つで満州にいたのかと複雑な気持ちで理解出来たのは中二の頃のように思う。そんな時、お下がり洋服をもらい赤い色のリボンをつけてうれしく学校へ行った男の子ではっきりものをいう子がいた。赤いものをつける事に対して傷つく事をいわれた事がわすれられない。

満州では豊かな食生活だったのだろうか、ふる里へ帰ってからの事「お肉ちゃんが食べたい、お菓子が食べたい」大人をこまらせた事が度々あったらしい。祖母が一生懸命つくった「蒸しいもを寒中に干した甘いおやつ」庭の「柿を湯ざおししたもの」等心をこめてつくったものがあるのに、わがままをいいしかられた事もあった。その頃の祖母は今の私の歳だったと思う、とてもしっかりした女性だったなと思ひ出す。

父が出張でたまに宮崎市へ行くと必ず河べりの山形屋で買ってきてくれた計り売りの三角・四角・五角・六角と様々の型のチョコレートや干しバナナをポケットに入れて喜ばせてくれた。又父は食まめな人でお店にはないスープやカレー、マヨネーズ、ギョーザ、マントウと手作りをやっていた。私は小さい時から手伝っていたが、マヨネーズをつくる時あわたてにはしを5~6本じょうずにあやつりつくるのにはすごい手品みたいだと真似してもなかなか出来なかった。

終戦時父は捕虜として「ぼたんこう」という所へ収容され大変だったらしい。待っていた母や私の前へ現れた父をみて私はキョトンとしていたらしいが、父はひげボーボーと汚れた服、ノミはぬい目にいっぱい、今は想像も出来ない。その父もおかげで7月17日92才の誕生日を迎えた。焼酎をおいしそうにたしなむが戦争の話はしない。

引揚げの石炭列車Vの字の底に荷物置き、その上に人間が乗り列車が止まると水溜りで赤ん坊のオムツ洗いや、身体を拭いたり。やがて船で博多に着くまでの間にホッとしたのか、力つきたのか、あきらめたのか、口々につらいかなしい話顔があったという。子供を満人に預けたとか、そっと置いてきたとか・・・。私も子守りをしてくれていた満人のおねえちゃん(12才)が可愛がるからおいて行って、平和になったら迎へに来るといいよとその母からいわれたらしい。それからテレビのニュースをみる度に何故か一人で静かにみている。大変な中つれて帰ってくれた父母に感謝の気持ちのみ、ことばがみつからない。濱崎けい子さんのお芝居、これからも一年に一回は必ず観たいという思いが強くなる。濱崎さんも健康に注意して一人でも多くの人に観せてほしいと願っています。(黒木淑子)

育児だより

* かんきつ姉弟 *

夏の毎日

金丸 智子

この夏、いつも以上に母(私のこと)は忙しく、毎週末は何かしら予定が詰まっている。という日々であった。前半7月は、長男のイベントに首をつっこみ「えれこっちゃん宮崎」に参加、それにもものすごく力をそそいでしまったので、8月になっても少しふんばった状態になった。

さて、夏休みも後半、家族で旅行をしていないので、思いきって阿蘇へ、ずうずうしくも宮沢さん家に泊めていただいた。出発の数日前 TV で「みやざわ劇場」をやっていて、ちび2人にこれを観るのよと教え、期待をさせた。すると千夏は、かなり楽しみになったらしく、阿蘇への道すがら「おさるさんところへ」を連発。待望のショーは、身をのりだしての観劇で、その後小学生にっついてカドリードミニオンを走りまわっていた。



朔日は、というと、歩行もしっかりしてきて階段の登り降りをマスター。ベビーカーにはおさまりたくなくて、自由に歩ける所はわがもの顔で歩きまわり、これ又満足していた様である。チンパンジーのパン君と対面した時は、仲間がいるとでも思ったのか目をそらさず、コミュニケーションをはかっていた。

とにかく、行ける所は行き、遊びまくった夏休み。楽しかったが、ふところにはイターい日々でもあった。まあ、いいか。みんなして味わったのだから。

* 小林より *

大山 磨佐恵

我が家の二男坊マーくんが、この夏私の実家の養子になった。イヤとは言えず、でも「やっぱ何だか、キンチョーするう…」というマーくんの目は、不安でいっぱい。

この育児日誌を「そんな事もあったねえ」と笑って読めるくらい大人になる日は遠いけれど、ゆっくり、しっかりいろんなプレッシャーをはねのけながらたくましい大人になってね。友人に一言「じゃあ弟になったんだね」と言われ、なんだかフクザツな母です。



マーくん

事務局日誌より

- 6/15(木) 6月定例会
- 7/6(木) 防災フォーラム 参加(則松、吉川)
- 11(火) 「高鍋町子育て応援フェスティバル」
実行委員会参加(則松、黒木淑子)
- 13(木) 7月定例会
- 16(日) 「花いちもんめ」 稽古
- ~21(金) //
- 22(土) 子どものための舞台公演 2006 夏
平和を考える集い「花いちもんめ」公演
参加者 大人 34 おやこ 3 子ども 3
- 8/18(金) 8月定例会



7.30 山梨から馬場ファミリー
(南九大 90年代初頭卒)

野の花館へのご支援感謝します！

黒木啓純、上野節子、松本和育、松本允子、永井賤子、永井寛子、永井悦子、橋口巳俊、石橋 諭・春江、小柳由里、佐藤登貴子、辛島幸子、金海純子、田中睦美、丸山暁美、友成昌亮、岡山 勇、黒岩共一、釜淵章匡、橋本律子、畠中恵子、野津手内科医院、松田くるみ、中山紘子、辛島 泉、竹内 元、杉本和宏、松山章子、前 良子、岡田心平、矢野やす子、中武真理己、金子信吾、重永圭二郎、重永重美、奥津勝洋、林 真美

2006年度分会費、寄附金をよせてくださったみなさまです。[順不同、敬称は省略させていただきました]

ご意見ご感想ご質問などお寄せください。宛先: 特定非営利活動法人 野の花館

〒884-0002 宮崎県児湯郡高鍋町大字北高鍋 2664 phone & fax: 0983-23-0701